

明日への投資

吉岡 宏 高

長く晴天が続いた後に、突然として空一面を覆った黒雲。少し我慢していれば、いつか晴れるはずだと思ひ、家の中に閉じこもるのだが、日付が変わっても雨は降り続き、雲は厚くなるばかり。晴れた日の作付けには大成功した経験はあるが、今まで経験したことのない長雨では何をすべきなのかわからない。だから、過去の成功を捨てきれず、雨が降っているのに晴れた日と同じやり方で種を蒔き続け、次々と腐らせてゆく…。今日、世の中を覆う逼塞感を例えれば、このような姿なのではないだろうか。

将来の見通しがきかず、何をやってもうまく行きそうにないので、つい目先の成果にとらわれる風潮が蔓延してしまふ。お手軽な「〇〇井」「□□焼きそば」のような、一時的流行とネーミングに走る観光振興策など、その典型と言えるだろう。「マーケティング」とか「ブランド」とか言葉、だけ一人歩きするが、結局は流行りそうなものを寄せ集めて名前を付けるだけではないか。確かに、これで今日の飯にはありつけるかもしれない。しかし、つま先だけ見て、確たる明日の方向を定めることができるのだろうか。今日があつての明日ではあるが、明日があるからこそ今日の意義がある。

ここは頑張つて、明日へ投資し未来を切り開くしかない。問題は、その投資先をどうするのか？ GDPが五〇〇兆円足らずの国で、国・地方の長期債務残高が九〇〇兆円を超えている中では、過去のように何でも大盤振舞いして新しいものを作る訳にはゆかない。そこで、足もとの資源を手がかりにすることと、形のあるモノだけではなく思い・誇り・技・経験などの見えない資源をいかにうまく使うかが焦点となる。

では、どのように具体化するのかという段になると、地域の中だけに目を向けているようでは、道筋はなかなか見えてこない。その良策の一つとして、外の眼差しを契機にした気づきという所作を、観光という概念の中で展開すれば良いのだ。

そのような価値観の下で展開される観光は、必ずしも一人でも多く人を呼ぶ必要はない。極論すれば、有象無象の一万人と、思いを共有できる有為な一人は、等価になるかもしれない。前者は、今すぐ観光収入を得ることができるが、大部分はその場限りの関係で、幸せの青い鳥探しに奔走し続けることになる。後者は、現在価値は僅少でも、将来に向けた創発的な効果の可能性がある。

果たして、そのような都合の良い「有為な

人」と出会うことができるのだろうか？…それは、実践的に探つてゆくしかないだろう。未来への投資は、常にリスクを伴い必ず成功するとは断言できない。しかし、足もとの資源を使つて、形のないものを価値化する取り組みには大きな投資は不要なので、仮に失敗したとしてもダメージは少ない。

このような考えが成立するのかどうかを、私は故郷の旧空知産炭地域で実践的に検証してきた。「炭鉱の暗い過去を払拭する」というスローガンの下で、典型的な負の地域資源と評されてきた「炭鉱の記憶」をもとに活動を始めて一〇年余。着実に確かな手応えを感じてきたし、特に昨年夏から岩見沢駅前「そらち炭鉱の記憶マネージメントセンター」という旗印を上げてみると、当初見えなかった創発的な動きが一段と加速しつつある。今や、海外（英ウェールズ、独ルール、旧東独ラオジツツ…）、国内（大牟田、筑豊、常磐…）、道内（小樽、室蘭…）、そして空知内部を結び交わりが重層的に展開するようになってきた。

取り組みを通じて、土砂降りの雨の中を進むような先行投資の不安に耐えて、実践からの知見を思考につなげ必要な行動指針を得るためには、地域自身が独自に「考える」ことが重要で、そのためのシンクタンク的な職能が必要だということを強く感じてきた。雨の中を進むには、進もうという意志・勇気とともに、過去の成功にとらわれない発想力を裏打ちする雨具が必要なのである。

八よしおか ひろたか・札幌国際大学観光学部教授